



Title	子どものためのデザイン表現に関する考察：村山知義の童画を例に
Author(s)	神野、由紀
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

子どものためのデザイン表現に関する考察

— 村山知義の童画を例に —

神野由紀／関東学院大学

1. はじめに

日本における近代的な子ども観は、様々な商品のデザインを介して人々に受容されていったが、多くのデザイナーもまた、その商品世界からの影響を強く受けている。本発表では、大正期に誕生した童画表現に焦点をあて、中でも前衛芸術家として知られ、童画家としても活躍した村山知義の童画作品を考察した。

村山の前衛芸術家としての経歴は、遊学先のドイツで知ったダダ、構成主義から影響を受けた時代と、その後傾倒した社会主義思想を反映させた時代に大別できるが、これが彼の童画のスタイルにも影響を及ぼしていく。しかし、村山の童画にはそれ以外の彼の個人的な体験もまた、強く反映されていた。

2. 村山知義の童画

1) 童画家・村山知義について

村山はその最も初期から最晩年まで、精力的に童画の制作を続けている。大正9年、『子供之友』の童画を手掛け、大正13年には『子供之友』誌上で童話作家として活躍していた岡内籌子と結婚し、『子供之友』『コドモノクニ』などに夫妻で多くの作品を発表した。

2) 作風による分類

本発表では、村山の生涯にわたる作品について、『子供之友』『コドモノクニ』を中心に調査し、その結果、次の3つのグループに分類することができた。

① 中世キリスト教世界からの影響

これは村山の初期の童画から見られた傾向で、横向きの安定感のある人物構図、太く

はっきりした輪郭線、キリスト教的主題、写実的でわかりやすい描写といった特徴が挙げられる。大正9年「三人のなまけものの女の子のおはなし」では、既に上記のようなスタイルが確立されているのが認められる。



「三人のなまけものの
女の子のおはなし」1920



「ギンザ ノ ヤケアト」
『子供之友』1923年10月

② 前衛芸術からの影響

ドイツから帰国後、大正12年の秋頃から再び『子供之友』に童画を発表するようになった。「ギンザ ノ ヤケアト」などに見られる幾何学的形態、対象物の抽象化、構成的レイアウトによる画面などは、明らかに構成主義の影響がうかがえる。しかし、この時期にも渡欧以前の中世風の絵は存続している。

③ 社会主義的思想からの影響



『少年戦旗』表紙
1929年8月



『コドモノクニ』表紙
1939年11月

大正15年頃から社会主義に傾倒した村山だが、上笙一郎によれば、この時期に見られる単純な線と色、美術に習熟していない労働者・農民の子どもにもわかりやすい、メッ

セージ性が強い、といった特徴は、「プロレタリア童画」の先駆であるという。しかし、『少年戦旗』の童画を手掛ける一方で、中流家庭向け絵本である『子供之友』や『コドモノクニ』に、初期からの画風を用いてブルジョワ的子ども世界を描き続けてもいる。

3. 村山の童画の背景

上記の3つの画風については、新たな画風が以前の画風と常に共存するが特徴である。特に初期の中世キリスト教的なスタイルは、繰り返し彼の童画の中に現れている。この画風の背景について、本発表では次の5点に着目した。

① 羽仁もと子と『婦人之友』

クリスチャンの羽仁もと子は、西洋的な家庭観を理想とし、『婦人之友』はこれを日本に浸透させるメディアとして機能していた。村山の母・元子も影響を受けた一人であり、村山は後に羽仁への批判が生じながらも、その世界観を共有していたと考えられる。

② 岡内籌子との結婚

童話作家としての筹子は、親しみやすさ、わかり易さを特徴としており、挿絵と一体化した作風である。このため、童画表現においては、村山は難しい主義主張ではなく、むしろ自由に楽しく描くことを選んだのではないかと考えられる。

③ 『少年世界』の影響



『少年世界』泰西名画
1907年6月

小学校時代『少年世界』の愛読者であった彼が特に関心を示したのが、雑誌の口絵にしばしば掲載された西洋画であった。同誌では明治44年頃から西洋画の口絵が多くなり、村山はこれら洋画の世界を通して西洋世界への憧れを抱いていっ

たと考えられる。

④ 西洋の童話からの影響

叔父のドイツ土産の絵本の中の写実的で重厚な絵は、彼の作風にも大きく影響を及ぼした。さらに母・元子による「フランダースの犬」や「小公子」などの読み聞かせも、彼の情操世界を決定したものと考えられる。

⑤ 教会での体験

母・元子のキリスト教信仰は、後に批判するようになるものの、彼の西洋文化受容に大きな影響を及ぼした。牧師からもらった絵入りカードに描かれたスコットランドの田園風景と暖かい家庭生活のイメージからの影響は、特に童画においては終生続くことになる。

4. まとめ

村山の幼少期の雑誌など商品を介在させた個人的体験によって形成された西洋イメージは、モダニストとしての活動が本格化していく中でも、彼の中で生き続けた。彼の童画の背景を幼少期の体験を含めて考察することは、同時期の多くのデザイナーが子ども世界に強い関心を抱いていた状況を理解する鍵にもなると思われる。

主要参考文献

- 村山知義『演劇的自叙伝』東邦出版、1970年
上笙一郎『日本の童画家たち』くもん出版、
1994年
『日本児童文学体系26（村山籌子、平塚武二、
貴司悦子）』ほるぷ出版、1978年